

# 語り伝えよ

山崎 蒔野

この記念碑は、いつしか無くなるであろう。しかし、この恨みを滅してはならない。この記念碑のことを口にして、長く子孫に語り伝えよ。両石村をもって死んだもの790人。その狂乱の中、無事生き残ったものわずか204人のみ。ああなんと悲劇であろうか。

私の住む両石は、明治29年と昭和8年の2回、大きな津波の被害に遭っています。明治29年の三陸大津波から113年。今年も祖父に連れられ、家族みんな、両石海嘯記念碑に手を合わせました。

祖父は私が小さい頃から、津波の話をしてくれます。しかし、祖父は、2回の津波の後に生まれたので、実際には体験していません。だから、津波の話をするときには、おじいちゃんのおじいちゃん、おじいちゃんのお父さんがよく登場します。

「おじいちゃんのおじいちゃんとお父さんはな、避難所に着いてからも、波が上がってくるかもと、思うと怖くて、避難所よりも高いところまで逃げたんだ。」

津波の恐ろしさを祖父が私に伝えてくれます。荒れ狂う大波、飲み込まれる人々、響き渡る阿鼻叫喚の声。家族がバラバラになる悲しさ、祖父の話の聞いていると、先人たちの泣き叫ぶ声とともに、おじいちゃんのおじいちゃん、おじいちゃんのお父さんの、こんなに悲しい思いを二度と繰り返させたくないという強い意志を感じてなりません。

両石では、明治には800人ものが亡くなりました。しかし、昭和の津波の時には、死者は3人。地域で避難訓練をし、それぞれの家族が、先人たちの教訓を代々語り継ぎ、守り続けてきた成果でした。家族の絆は、両石の誇りと言ってもよいでしょう。

毎年3月3日、過去の教訓を忘れまいと釜石全体で避難訓練が行われています。私は、家族全員で必ず参加しています。行きたくないなあという私を、祖父母、両親が無理矢理連れて行



両石海嘯記念碑

くとというのが、正直なところです。朝は早く起きなければならぬし、中学生は誰も参加しないし……。過去の教訓がある両石という地域に住んでいるにもかかわらず、私は、津波に対して怖いという実感もなく参加していました。

しかし、今年の7月、深夜に大きな地震がありました。私と妹は、慌てて両親の部屋に駆け込み、一晩、家族みんなが同じ部屋で枕を並べました。そのとき、ぼんやりと祖父の話を思い出していました。おじいちゃんのお父さんは、いつ津波が来ても良いように、「明日着る服は枕元においておけ」とか「靴は履きやすいように並べておけ」と口ぐせのように言っていたことを。

なかなか現実味のわからない津波。それを懸命に語り伝えようとする祖父。血のつながりのある家族が伝えることこそ、私は大切だと思えます。私たちは、今、家族の絆の強さを問われているのだと思います。いざというとき、どこに逃げるかを話し合っておく、誰が誰を助けるのか、普段どれだけ自分のことは自分でできるのか、すべてが家族の中でしつけられ、家族のなかで語り伝えられ、育んでいくものなのです。

両石海嘯記念碑のことを口にして、  
長く子孫に語り伝えよ。

祖父が私にしてくれたように、私も、いつの日か、自分の子ども、孫の手を引き、手を合わせ、語り継いでいきたい。石碑と私を結んでくれた祖父のように。